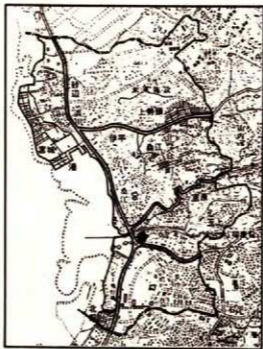


ちゃ たん とすし

北谷城

—北谷城第一次調査—



1984年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

北谷町は、文化財に関してややおくれぎみの感はありましたが、昭和57年、町文化財保護条例ができて本格的に取り組むことになりました。

スタートして間もないことではありますが諸問題が山づみされております。文化財保護審議委員も来年発足のはこびとなり、専門委員の先生方の具申を仰ぎ、文化財の保存と活用に取り組んでゆく所存であります。このことは文化財保護法はもとより、町民の日常生活の中での文化財とはとの“間”を考慮におき、過去の人々が育みあげた営みを、現在・将来に向けて、生活の糧になるような文化行政をおこなわなければならないと思います。当面、町内に存在する文化財の把握と町民に親しめる文化財の橋渡しの手掛りをつかむことが急務と考えております。

今度、それらの一環として北谷町唯一の北谷グスクの発掘調査を進めることとなりました。北谷城は「北谷村誌」にあるごとく、“北谷”の名称とも深い関わりのある、伝承を残す城であります。伝承の域に達していない状況であります。本町の文化財のシンボルとも言える北谷城の発掘調査では、14・15世紀のグスク時代の青磁や銭貨など、中国からの請来品や建物の跡と思われる敷石遺構などが出土しています。その下層からはさらに古い貝塚人たちの使用した土器なども出土し、長い歴史のうつり変わりのあることが明らかになりました。数少ない貴重な資料で、関係者からも注目を浴びています。

末文ではありますが、委託を心よく受けて下さいました知念勇先生をはじめ、玉稿をよせていただきました嵩元政秀先生、現場視察までおこなってもらいました町議員の皆様にお礼を申し上げます。

北谷町教育委員会

教育長 真栄城 兼 徳

例 言

1. 本報告書は昭和58年度の文化財調査として知念勇氏に業務委託したものをまとめたものである。
1. 第3図の平版測量図は昭和57年夏期に調査したものである。実際に際し、以下の人々に協力してもらった。

琉大OB…呉屋義勝、照屋正賢、恩河尚
沖縄市教育委員会…宮城利旭
北谷町史編纂室…金城睦弘、玉木真哲、古我知洋子、野原恵美子
北谷町教育委員会…高安晴善、大嶺初美
1. 遺物の実測・トレースは新里斉、国吉喜盛、亀川盛勝、照屋孝による。
1. 執筆は嵩元政秀、知念勇、中村恵がおこない、その文末に記名してある。
1. 出土した資料については、北谷町教育委員会に保管している。
1. 編纂は主に中村恵があたった。
1. 表紙題字は仲本朝勇先生の揮毫による。

本文目次

はじめに	
一 遺跡の位置と環境	2
二 遺跡の立地と歴史的環境	4
三 調査の概要	5
1 調査に至る経過	5
2 調査組織	6
3 発掘の経過	8
四 調査の内容	8
1 層序	8
2 遺構	12
敷石遺構	12
柱穴	13
3 出土遺物	14
土器	14
青磁	17
白磁	26
陶器	26
天目	26
須恵器	26
瓦質	27
小結	27
鉄釘	27
その他の鉄製品	28
銭貨	28
その他の銅製品	28
自然遺物	30
五 まとめ	30

挿 図 目 次

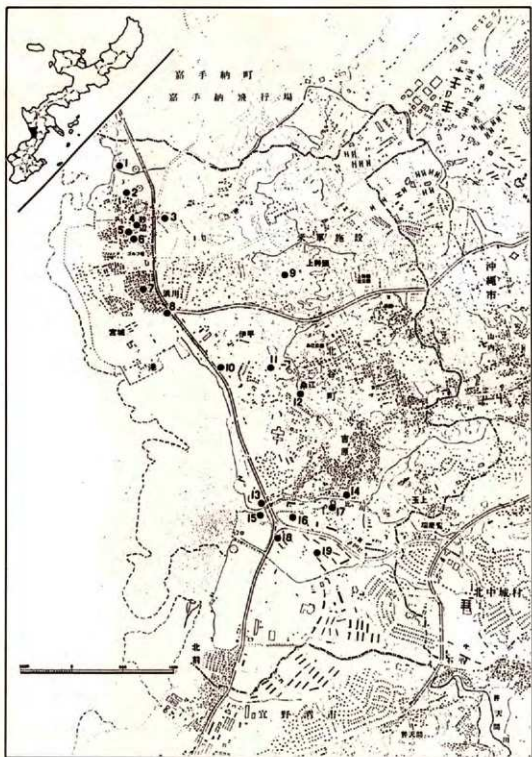
第1図	北谷町の位置と遺跡分布図	1
第2図	北谷城遺跡群	3
第3図	北谷城平板測量図(1/1500)	7
第4図	北谷城の一・二の郭とグリット設定図(1/800)	7
第5図	土層断面実測図(1)	9
第6図	土層断面実測図(2)	10
第7図	敷石遺構実測図	11
第8図	柱穴プラン実測図	13
第9図	土器実測図(1/2)	16
第10図	青磁・白磁実測図(1/2)	18
第11図	青磁実測図(1/2)	19
第12図	青磁実測図(1/2)	21
第13図	青磁・陶器実測図(1/2)	22
第14図	青磁実測図(1/2)	23
第15図	青磁・白磁・須恵器・陶器・瓦器実測図(1/2)	24
第16図	陶器・天目・白磁(1/2)	25
第17図	鉄釘・鉄製品・銅製品(1/2)・銭貨(1/1)	29

表 目 次

第1表	北谷町内遺跡分布図	2
第2表	出土土器・須恵器・陶磁器一覧	15
第3表	銭貨出土一覧	28
第4表	貝類出土一覧	32

図 版 目 次

- 図版 1 上 北谷城遠景（西洋上より）
下 北谷城遠景（北東より）
- 図版 2 上 北谷城遠景（南西より）
下 北谷城内樹林状況
- 図版 3 上 積石残存状況（一の郭）
下 二の郭伐採前状況
- 図版 4 上 二の郭伐採後の状況
下 グリット設定状況
- 図版 5 上 K-90.91, L-91 グリットの敷石遺構（西側より）
下 K-90.91, L-91 グリットの敷石遺構（南側より）
- 図版 6 上 O-96 グリット第三層礫出土状況
下 O-96 グリット南壁面層と柱穴検出状況
- 図版 7 上 V-101 グリット西壁面層序状況
下 V-101 グリット遺物出土状況
- 図版 8 上 A類土器外器面
下 同内器面
- 図版 9 上 B・C類土器外器面
下 同内器面
- 図版10 上 青磁外器面
下 同内器面
- 図版11 上 白磁・青磁・陶器・須恵器外器面
下 同内器面
- 図版12 上 青磁・陶器外器面
下 同内器面
- 図版13 上 青磁・白磁・陶器外器面
下 同内器面
- 図版14 上 白磁・青磁外器面
下 同内器面
- 図版15 上 青磁外器面
下 同内器面
- 図版16 上 銭貨表裏面
下 調査員スナップ



第1図 北谷町の位置と遺跡分布図

一、遺跡の位置と環境

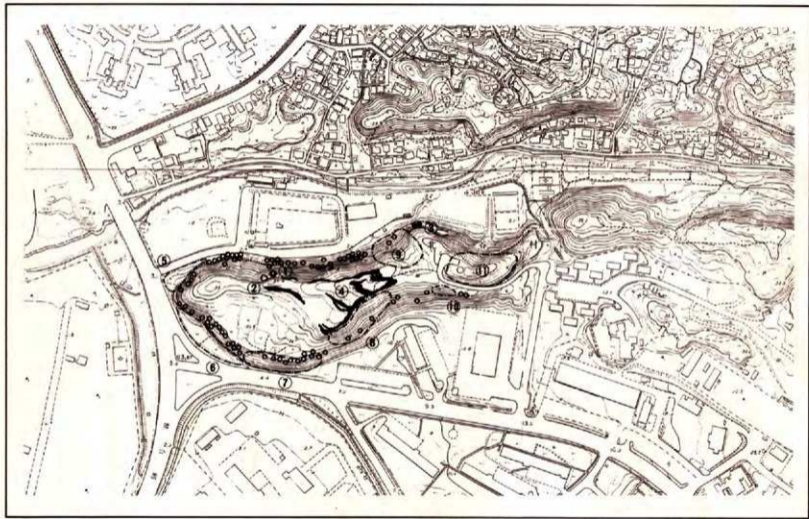
北谷城の所在する北谷町は沖縄本島中央部よりやや南に位置する。

本島のほぼ南北にはしる標高約100mの脊梁を東側にもち、沖縄市や北中城村との町境をおき、西側には東シナ海の洋上を前面に望む東高西低の地勢をなしている。町内を流れる白比川や佐阿天川などの河川もそれをよく反映し、西流して洋上に注いでいる。北側は本島の南北を二分する砂辺～宇堅（具志川市）構造線によって、北の国頭累帯の上に南の島尻累帯が不整合に重なり、標高約60mの石灰岩台地が形成されており、そこには米軍の極東一を跨る嘉手納飛行場を越えて嘉手納町と接している。南側は佐阿天川（普天間川）河口に広がる穀倉地帯として名高かった瑞慶覧の低地帯を境に宜野湾市と隣合っている。

大まかに東高西低の単調な町内の地質であるが、東側の水溶性に弱い石灰岩台地は、西側の低地に接するあたりから浸食を受け、幼年期の複雑な小溪谷を派生させ、西側の沖積層低地と対象的な地形をかもしだしている。単調な西側のなかでも、北の砂辺一帯と北谷城一帯は脊梁地域から西側洋上にまで突出した石灰岩台地がみられ、その周辺部は先史時代の遺跡や古い集落の残る地域となっている。

㍿1	砂辺サーク原貝塚 (沖縄先史時代後期)	㍿11	ジョーミーチャー古墓
㍿2	砂辺サーク原遺跡 (沖縄先史時代前V期)	㍿12	桑江遺物散布地
㍿3	カーシーノポントン遺物散布地	㍿13	池グスク
㍿4	砂辺貝塚(沖縄先史時代前IV・V期)	㍿14	吉原東宇地原遺物散布地
㍿5	砂辺部落内グスク遺跡	㍿15	白比川河口遺物散布地 (沖縄先史時代前Ⅱ期)
㍿6	砂辺ウガン遺跡(グスク時代)	㍿16	北谷城遺跡群
㍿7	浜川千原岩山遺物散布地	㍿17	東御嶽(山川御嶽?)
㍿8	浜川ウガン遺跡(グスク時代)	㍿18	北谷番所址
㍿9	上・下勢頭古墓群	㍿19	北谷長老山遺物散布地(グスク時代)
㍿10	桑江シーサーモー		

第1表 北谷町内遺跡分布



第2圖 北谷城遺跡群

二、遺跡の立地と歴史的環境

北谷城は北谷町字グスク原に所在する。東シナ海に注ぐ白比川に沿って、舌状に伸びる標高35米の琉球石灰岩上に築かれたグスクである。現在城の西側崖下を国道58号線が横切っており、丘陵の先端部が一部国道によって削り取られている。

周辺のグスクには、北谷グスクと白比川をはきんで約50米北に池グスクがあり、東方直線距離にして約3キロ米の北中城村喜舎場嶽原にはヒニグスクがある。

池グスクは、北谷グスクの要害であったとも伝わっており、北谷城の出城的存在であったとも考えられる。

ヒニグスクは、標高約150米の琉球石灰岩丘陵上にあることがわがわいして、1960年頃から始まった、採石によって破壊されてしまった。それ以前までは、野面積みの石垣も残っていたようである。

1965年採石によって破壊される寸前のヒニグスクが一部嵩元政秀氏によって発掘調査が行なわれた。その報告書から出土遺物を見ると、13～14世紀のグスクであったことが推定される。

この時期は今回の発掘された北谷城の出土遺物からみると、両グスクが併存していたことが考えられ、何等の関わりをもっていたと考えられる。

北谷グスクは俗に「大川グスク」とも「池グスク」ともよばれている。築城等についての明確な記録はない。伝承では金満と称する按司の居城と伝えられ、金満按司は大川按司に滅ぼされたといわれる。北谷城北側の中腹には金満お墓と称する洞穴墓がある。

『おもしろさうし』¹¹¹ 15巻の58には、

きたたんの、世のぬし、

おさは、さし、よわへ、

さしやり、ふさり、よわちへ、

(北谷按司が「おさはつるぎ」さし給ひて、さして、いともよく似合ひ給ひて)

「おさはつるぎ」は脇差のこと、

等がある。

また『琉球祖先宝鑑』¹¹² 慶留間知徳著には、北谷王子が英祖王の二男としてあつかわれている。同書の北谷王子の項には北谷同村のノル殿内に御持、長男金満按司、二男福親雲上、三男伊礼大屋子、四男浜川親雲上、五男大嶺親雲上、六男熱田親雲上、七男安里親雲上、八男宜野灣親雲上、等があるが伝承の域を出ない。

『琉球国由来記』¹¹³ には<北谷城之殿>や<ヨシノ嶽>・<城内安室崎之嶽>が

あるが現在米軍基地となっているため、ダスク内への立入が禁止され、拝所はダスク外に移されて拝まれている。(知念 中村)

三、調査の概要

1. 調査に至る経過

北谷城の発掘調査は今回が初めてである。

これまでには、1960年の多和田真淳氏の報告が初めてであり、1957年4月、米人ワトソンによる“北谷城貝塚”の発見の紹介がある。同書によると「アカジャンガー遺跡や野国貝塚で見られる平底土器と同様のものである由。」との高宮廣衛氏の所見が述べられており、砂丘遺跡で出土する“くびれ平底”タイプの土器が採集されたとのことである。

1979年には琉大考古学クラブOBの恩河尚、呉屋義勝、米田善治、照屋正賢の諸氏によるフィールド調査がおこなわれ、北谷城丘陵周辺には7ヶ所遺物の採集できる地区が明らかにされた(第2図)。

1982年8月、城の平板測量をおこなった結果、城郭の保存状態は上部の石積みや、その一部については確認できないが、根石の保存は良く、城郭の規模や輪郭については把握できた。「北谷村誌」に述べられているごとく、城の東側は石垣の残りが良く、西側では薄い様相をなしている。

同年10月のフィールド調査によると、丘陵周辺の崖下には新古の墓群が82基あることが明らかになった。中でも按司墓や雅肇佐敷筑登之興道の墓と思われるものや、今帰仁村運天港の崖面に残る崖葬墓と同系統の墓もあることが明らかになった。

また同年、沖縄県教育委員会による城の植生調査がおこなわれ、51種の植生を確認している。

北谷城遺跡群についての詳細は下記のとおりである。

No1 金満按司墓と称される墓で、北に開口した自然洞穴を利用したものである。戦後移転を余儀なくされたため、現在、被葬者は不在である。洞穴入口の幅約3m、高さ6mの縦長部分に切石積みによって外界との閉塞石としているが上部まではおよばないと見られる。内部は広く約50㎡ほどある。急斜面にそって墓道の石段は作られているが、前庭部の広場の痕跡はない。

No2 金満按司墓より10m西側に、西に開口した小さな自然洞穴を利用した墓がある。墓口を野面積みで覆った墓で、前庭部に石碑を建立した基部が残る。「北谷村誌」にみられる雅肇佐敷筑登之興道とされる人物の墓と思われる。

No 3 崖の中腹に方形に掘り込まれた2基の墓で、入口近くの上下面に径15cmほどの円柱状の凹みがある。外界と木材によって閉ざしたと見られる墓である。今帰仁村運天港にみられる崖葬墓と形態的に類似している数少ない墓である。

No 4 北谷城の石積みの輪郭が残り、3つの郭が確認されている。

No 5 崖下のゲート近くで、フェンサ下層式土器の採集できる地域である。広がりについては不明である。

No 6 近世の陶磁器が出土する地域である。崖下に「塩川」と称する湧水池がある。塩水を含むという。北谷城主の死活を左右した伝承の残る湧水池である。

No 7 No 6とはやや異なる近世陶磁器が採集できる地区である。県道130号線の側溝工事の際、染め付けなどの磁器などが溝の断面で観察できたとのこと。

No 8 崖上や崖下で、陶磁器やフェンサ下層式土器やグスク土器が採集できる地区である。中でも青磁片が目につく地区である。

No 9 伊波・荻堂系の沖縄先史時代前III期の土器片や貝殻が採集できる地域である。

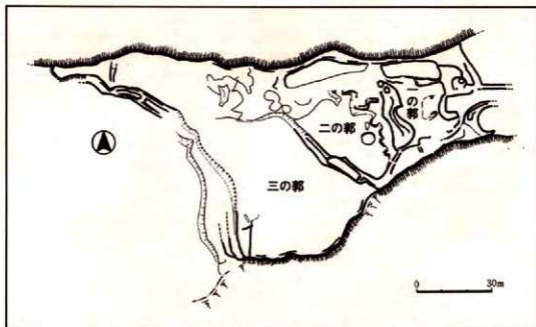
No 10 崖の中ほどの狭い範囲に、フェンサ下層式土器や貝殻が採集できる地区である。崖上のタンク施設のあるNo 11地区の一部の可能性もある。

No 11 1960年の『文化財要覧』に多和田真淳氏によって北谷城貝塚と紹介された地区である。細片の土器が採集される。

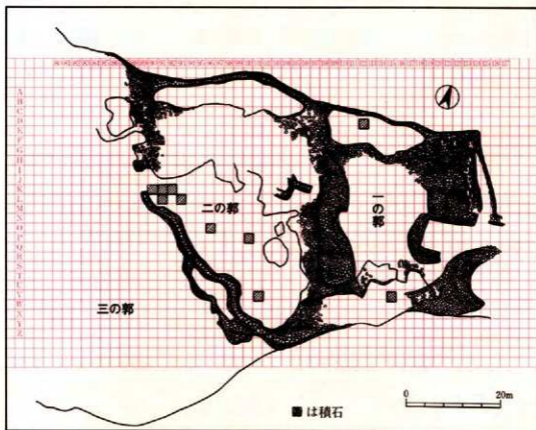
城周辺の丸記号は崖の中ほどや下に形成された古墓群である。按司墓などを含めると82基になる。なかには墓室内の奥にもう1つの墓室をもつものや、1枚石を組合せて箱状の石棺としたものなどもある。

2. 調査組織

調査責任者	真栄城 兼 徳	(北谷町教育委員会教育長)
事務局	金 良 宗 吉	(北谷町教育委員会社会教育課長)
	比 嘉 由 孝	(北谷町教育委員会社会教育主事)
	伊 波 里 美	(北谷町教育委員会社会教育課臨時職員)
調査指導	嵩 元 政 秀	(興南高校教諭)
調査主任	知 念 勇	(沖縄県立博物館主任学芸員)
調査員	中 村 愿	(北谷町教育委員会社会教育課嘱託)
調査参加者	亀 川 盛 勝	比 嘉 司 島 袋 深
	島 袋 和 代	田 端 邦 子 与 那 嶺 豊
	又 吉 健 一	古 堅 勝 美 宮 里 信 男
	廣 山 洋 一	長 尾 英 子 金 城 進
	仲宗根 求	国 吉 喜 盛 新 里 斉



第3図 北谷城平板測量図 (1/1500)



第4図 北谷城の一・二郭とグリッド設定図 (1/800)

3. 発掘の経過

北谷城の発掘調査は1984年2月13日～2月27日の17日間おこなった。調査区は東西約160m、南北約50mの城郭をすべて覆う範囲を考慮に入れたグリット設定をおこない、西(左)から東(右)へ算用数字を用い、北(上)から南(下)へはローマ字を付した。

今回は包含層の確認とその広がりによって重点をおいて調査区を設定した。

基盤の石灰岩の露出が著しい一郭の中央部はとりやめ、城郭の中でも特に遺物の採集がたやすく、土壌堆積の厚いと思われる二郭を中心にグリット設定をおこなった。

二郭には北西部のK-90・91・92グリット、L-91・93グリットの5ヶ所、中央部にO-96グリット、P-100グリットの2ヶ所、南にV-101グリットの1ヶ所の計8ヶ所。

一郭では北の畠地にD-112グリット、南にV-115グリットの2ヶ所をもうけ、合わせて計10ヶ所の設定をおこなった。

(中村)

四、調査の内容

1. 層序

一郭のV-115グリットをのぞく他のグリットは旧畠地のためか、多少の相違こそあれ、ほぼ類似した層序をなしている。

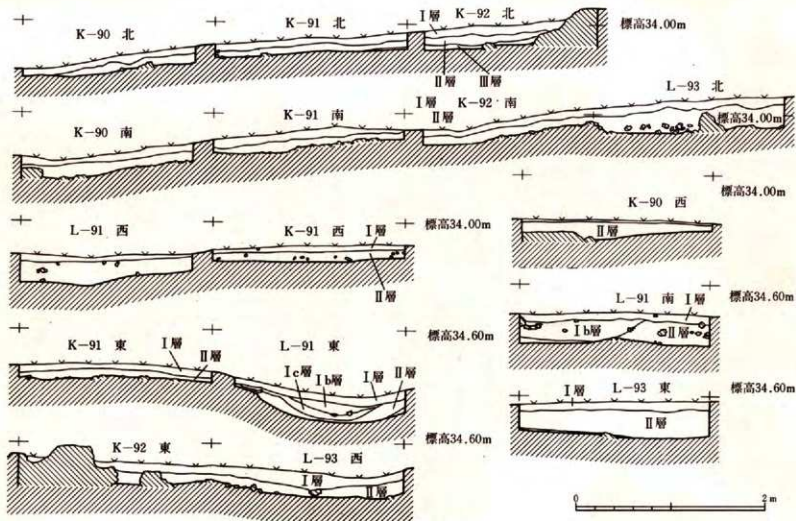
二郭の北西部のK-92グリットを中心に、5つのグリットでは第Ⅲ層上面で、灰色の火を受けたテーブルサンゴやキクメサンゴなどの破砕礫が面をもって検出されたが、性格が明らかでなく、その下位の層序については次回の調査にゆだねることとした。

I層 畠地放棄後の腐植土層で暗黒色を呈している。

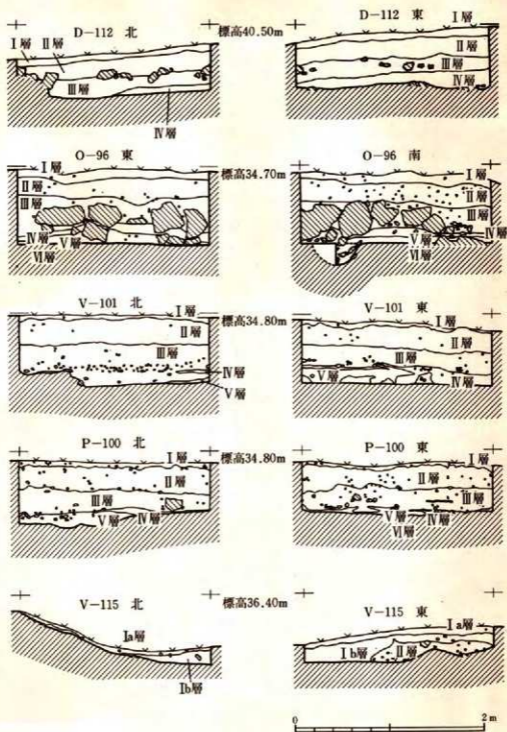
II層 暗褐色を呈する旧耕作土層で、破砕された豆粒大の石灰岩礫を多量に混入する粘性の少ない土壌である。青磁、褐釉陶器、グスク土器などの遺物を含むが、石灰岩礫同様コイン大に破砕されている。20～25cmの厚さの攪乱層である。

III層 炭や灰を多量に含む暗褐色土の未攪乱層である。粘性が強く、拳大から豆粒ほどの石灰岩礫を多量に含む混雑土層である。20～30cmほどの層である。

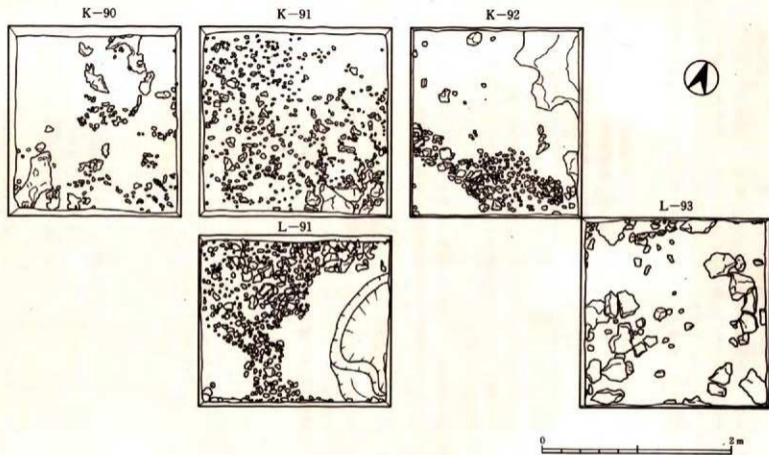
遺物は全体的に出土するが、やや下位のレベルで多量に出土する傾向が



第5图 土层断面实测图(1)



第6圖 土層断面实测图(2)



第7圖 敷石遺構実測図

ある。

P-100グリットではやや南西側に傾斜するものの、ほぼ全面に鹹水産貝や鹹魚骨などの自然遺物と陶磁器・土器が相重なる状態で出土する。

O-96グリットではひと抱えほどもあるキクメイシやサゴ礁の切石などの集みがみられ、その透き間に土砂が流入した状況である。礁間には規則性がみられず、投棄された感があるが、今回の調査をもって結論づけたい。

IV層 赤褐色の土層で地山に近い色を呈している。厚さは5~10cm前後と薄い。P-100グリットの北西角の第VI層の地山露頭部分から南西方向へ薄く尾を引いて形成していることから、東側の高い部分から流出した赤褐色土層であると思われる。

この層を境に上層と下層との遺物に多少の変化がみられる。

V層 炭を多量に含む黒褐色の土層である。層は15cm前後と厚みはないが、貝殻などを多量に含む遺物包含層である。数点の陶磁器類を含むものの、フェンサ下層式土器が目についた。

VI層 赤褐色の無遺物層で、いわゆる島尻マーゼ土壤の地山である。O-96・V-115グリットでは薄く、その下位の隆起石灰岩の岩盤の露頭がみられる。

O-96・V-101グリットでは第V層から掘り込まれた数十センチの円形柱穴が検出できたが、そのプランの性格については今回の調査にゆだねることとした。

今回の調査では包含層が確認でき、大まかに2枚の文化層の存在が明らかになった。

2. 遺構

今回、2種類の遺構を検出した。K-90・91・92、L-91・93グリット第III層上面にみられる敷石状の遺構とO-96、V-101グリットの第V層から第VI層に掘り込まれた径数十センチの円形柱穴遺構である。

敷石遺構

K-90・91・92、L-91・93グリットは二の郭の北西隅にあたる。北側に露頭している隆起石灰岩の岩盤と、南東側に拡がる畠地の接点にあたるが、表土からわずかの深度にもかかわらず、耕作による痕跡はL-93グリット以東にはみられず、現状を保持している。

礎群は角ばり、原形を保持しているものは極まれで、その位置かあるいはその

周辺部で破砕されている。しかも掘削工具を突き刺すことのできぬほどの集りである。

石質はテーブルサンゴやキクメイシなどのサンゴが大半で、いわゆる石灰岩礫は数えるほどである。

K-92グリットの南西角に集石の切目が直線状にあることや、L-91グリットの東側に集中する傾向から、L-91・92グリットの方に遺構は広がると思われる。しかし、L-91グリットの東側の円形落ち込みによって破損を受けている。落ち込みはその状況から、戦時中の砲弾落下の痕跡と思われる。

遺物は全体的に出土するが、青磁の盤の大形破片が特に目についた。

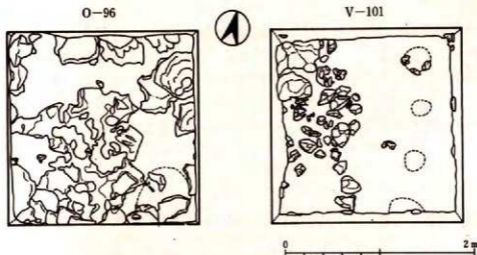
人為的に敷いたものであるが、その性格については次回の調査にゆだねることとした。

柱穴

O-96グリットの第VI層に第V層から掘り込まれた柱穴を検出した。径50～60cm、深さ30cmほどである。内部には根石と思われる拳大の数個の礫が立位状態で出土した。

V-101グリットの第VI層に第V層から掘り込まれた柱穴を4個検出した。グリットの東側にそって、連らなっている状態である。

内側の2個は径約20cmと小形で、両脇の柱穴は径約30cmとやや大きく、根石をもつものもある。
(中村)



第8図 柱穴プラン実測図

3. 出土遺物

土器

本遺跡出土の土器はくびれ平底をもつ鉢形のフェンサ下層式土器と鍋形のグスク土器や、いわゆる陶質土器に分けることができる。土器はいづれも細片で復元可能なものはなく、有文のものもない。口縁や胴・底部の形状や胎土の諸特徴から分類をおこなった。

A a類 第9図1のやや外反する口縁部と、同図2～7のようにくびれ平底の底面部が厚みがないフェンサ下層式土器のグループである。底部はくびれ部分が明瞭に残るもの(同図2・5・6)や、直線的な立ちあがりをもつもの(同図4・7)もある。器面は内外ともにザラつきがみられるが、焼成は良く硬質である。胎土は細かな精選された砂粒状で、細かな鉱物や赤ツブの混和物をも含んでいる。全体的に7～8mmと薄い器壁をもつ特徴がある。

A b類 口縁部の形状をうかがい知るものはないが、A a類と同様な形状を保持していたと思われる。フェンサ下層式土器のグループである。

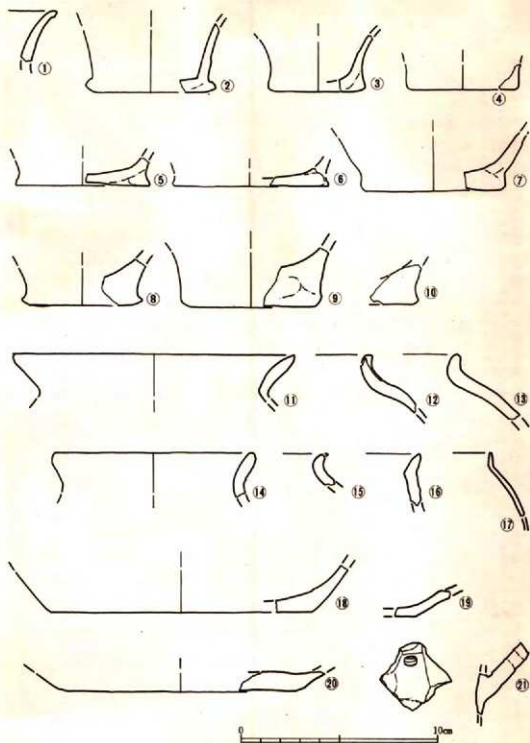
くびれ平底部分の底面が厚ぼったいものが特徴で、中には2cmほどのもの(同図9)もある。粘土質の胎土に粗い石灰岩や赤ツブの混和材をもつ土器で、外器面がアバタ状になっているもの(同図10)もある。焼成は良いものの、全体的に丸味をおび、しまりのない土器である。

B c類 胴部が張り、安定の良い底径の鍋形土器で、グスク土器と呼ばれるものである。

口唇部が舌状をなし、頸部がくの字状に外反する土器(同図11)である。器壁は薄く、アバタ状をなすものもある。胎土は精選された細粒状で、触れると粉末が付着するものもある。貝殻の粉末を混和材として用いている。

B d類 口縁部近くをそり返し、胴部が丸味の張りをもつ土器である(同図12・13・15)。器壁は厚く粗雑でアバタを呈する。粘土質の胎土で、粗い貝殻粉末や赤ツブを混入するが質量感は弱い。

B e類 B c・B d類の中間的な胎土を用いているが、緻密で重量感がある(同図16・20)。しかも鉱物を含み、肌触りがザラツとする。同図17の小形容器のものや、同図18のような大形の底径をもつ容器のものもある。



第9图 土器实测图(1/2)

1(O-96Ⅳ)、2(V-115Ⅱ)、3·6·13·14(P-100Ⅲ最下)、4·18(V-101Ⅴ)、5·10·11·15~17·19·20(P-100Ⅲ)、7(表探)、8(D-112Ⅱ)、9(P-100Ⅱ)、12(L-93Ⅱ)、21(O-96Ⅱ)

C類 陶質土器と呼ばれているもので、ロクロを用いて作られた器壁の薄い容器である。胎土は褐色の精選された細粒状で、細かな鉱物が混入している。同図21のような把手をもつ新しい容器もある。(中村)

青磁

青磁は碗が圧倒的に多く出土している。碗の他には鉢・皿・盤がある。口縁部と底部片はすべてを図示したが小破片のものが多く、完全に図上復元ができたのは第12図1の鉢1個だけである。器種の判別のつかない程の細片が多い。したがって、特徴の把握できる大形の破片についてだけ説明を行う。

第10図1(図版10)は、口縁部が外斜する連弁文碗である。連弁は、片切掘りで鍋を有する。口径は推算19.2㎝で、器厚は5~7㎝である。胎土は灰色で黒色の粒子を含んでいる。暗緑色をした不透明の釉が施されている。

同図4は口径推算17.3㎝、器厚5㎝口唇部が円味をもち口縁部が外傾をなす碗である。釉色は豆青色をなし、貫入はみられない。胎土は乳白色である。

同図5は口縁部が外折れをなす碗で外面に鍋を有する連弁文がみられる。口径推算13.7㎝、胎土、釉調は4に類似する。

同図6は、口径推算13.8㎝、器厚6㎝・口唇部は円味をもち口縁部がわずかに外反する。胎土は乳白色で釉色も豆青色で貫入はみられない。

同図10は、口折碗とみられるもので、外面にコブ状に盛り上った鍋連弁文を有する。胎土釉色は6に同じである。

同図12は、口縁部が玉縁状をし口縁部が外傾する碗。胎土は灰色をなし、釉調は暗褐色をなすなど、同図1に類似する。今回出土した陶磁器の中では12と1が最も古いタイプのものである。

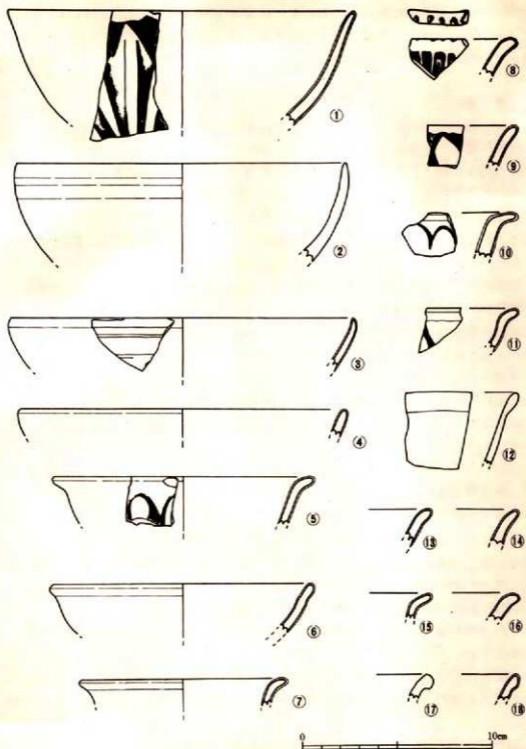
第11図1口縁部が外反をなす、口径推算11.7㎝の碗。器厚も3㎝と薄手である。胎土は灰色をなし黒色の細粒が混入する。釉色は淡い緑色をなすが内外面ともアバタ状で荒れており、二次的に熱が加わったのではないかと考えられる。

同図4は碗の底部とみられるもので、上面には豆青色の釉がかかり、外底部とみられる所は露胎である。外底部のへう削痕の上にメ印がみられる。胎土は乳白色をなす。

同図8は、口唇部が玉縁状に円くなり、口縁部がかかるく外反する。口径推算20㎝もある大形の碗である。胎土は灰色をなし、釉は暗褐色で全面に貫入がみられる。

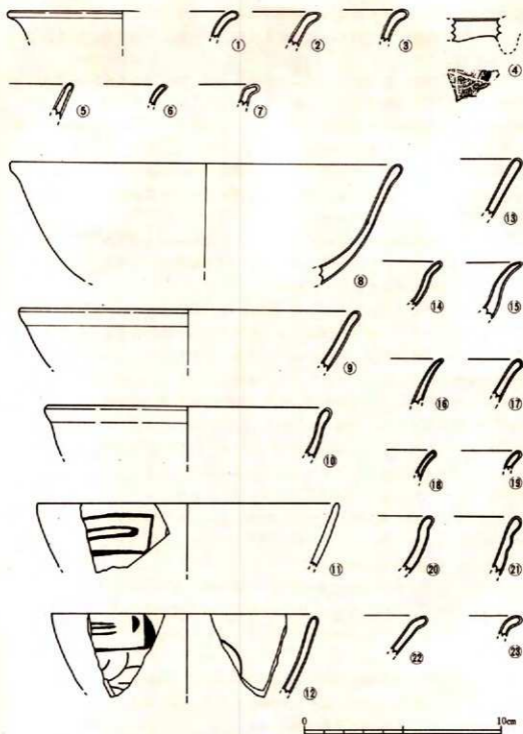
同図9は、口縁部が外傾する碗。胎土は灰色、釉は緑色をなし、全面的に貫入がみられ、口径推算17.2㎝である。

同図10は、口縁部が玉縁状になり外反する碗、口径推算14.5㎝。胎土は乳



第10图 青磁·白磁实例图(1/2)

1·3(P-100Ⅲ)、2(K-92Ⅱ)、4·9(V-101Ⅱ)、5·6·8·16(D-112Ⅱ)、7(L-93Ⅱ)、
10-13(L-93Ⅱ)、11(K-91Ⅱ)、12-14(V-101Ⅲ)、15-17(O-96Ⅰ)、18(P-100Ⅱ)



第11图 青磁类测图(1/2)

1·3·9·21(D-112 II)、2(L-93 I)、4(K-90 I)、5-16(P-100 II)、
 6·13·17(O-96 III)、7(K-91 II)、8(L-91 II)、10-12·22(V-101 III)、
 14-15(L-93 II)、18(L-93 I)、19(O-96 IV)、20(P-100 III)、23(V-101 II)

白色で良質、豆青色の光沢のある釉が施され、貫入はみられない。

同図11は、外面口縁付近に雷文帯をもつ碗。口径推算15.4浬、胎土は淡灰色で釉色は緑色をなす。

同図12も、外面口縁部付近に雷文帯を有する碗、雷文帯の下には唐草状の文様が施されている。口径推算13.5浬、胎土は灰色、釉色は暗緑色をなす。

第12図1は、口縁部が外傾する鉢。口径25.5浬と大形である。内面には細連弁文が施している。口唇は円味をおび高台がやや内側へ向って尖っている。外面底部に露胎部が一部みられる他は、全面豆青色の釉がかけられ貫入がみられる。胎土は乳白色をなし良質である。本品が今回発掘された青磁の中では唯一の口縁部から底部までつながる資料である。

同図2は1と同器種の鉢とみられる底部片。内面胴部には細連弁文が施され、内底見込みには、花文がスタンプされている。胎土釉調は1に類似するが底部高台は方形状に成形され、畳付が円くなる。

同図3は、器種としては1と2に同じとみられるものである。内面胴部には細連弁文が施されているが、圓円内の見込みは無文である。胎土は灰色で外底中央部が褐色となることや釉調が暗緑色となることなどは異なる点である。外底中央部は露胎となる。高台のつくりは2に近いが畳付部が2よりは円味をもっている。

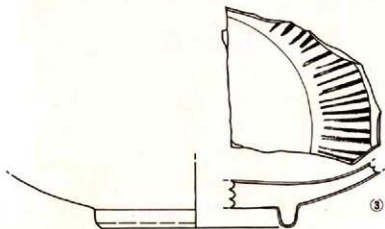
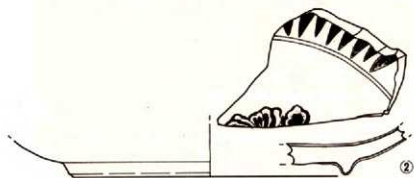
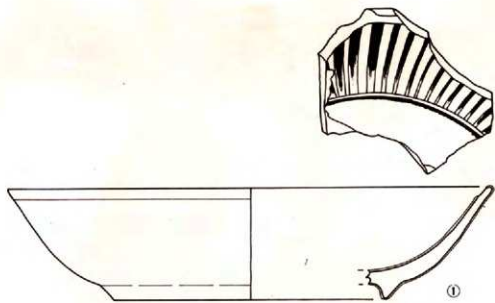
第13図の5以外はすべて盤とみられるものである。14の1個だけが底部で他はすべて口縁部である。口縁部の端部を上につまみ上げる鈎状をなす。内面に細連弁文がみられるのもこれらの特徴である。同図1は口径20浬、2は19.6浬、3は24浬、4は24.4浬である。これらの盤のうち9～12以外はすべて内外面とも漂白されたように青磁の色が抜けて、白っぽくなっている。

第14図1は、底径6.3浬の碗底部、内底見込みには印花文がある。外底重ね焼痕が露胎となる他はすべて、釉がかけられている。胎土が白色をなすため、釉の発色もよく、きれいな豆青色となる。

同図2は、底径5.7浬の碗底部である。内面沈線の圓円内の見込みには印花文がみられる。胎土は灰色、外底内は露胎で他はすべて暗緑色の釉がかけられている。へらけずり出し高台で畳付外側がけずられ畳付が尖っている。胴部の器厚3耗と薄手である。

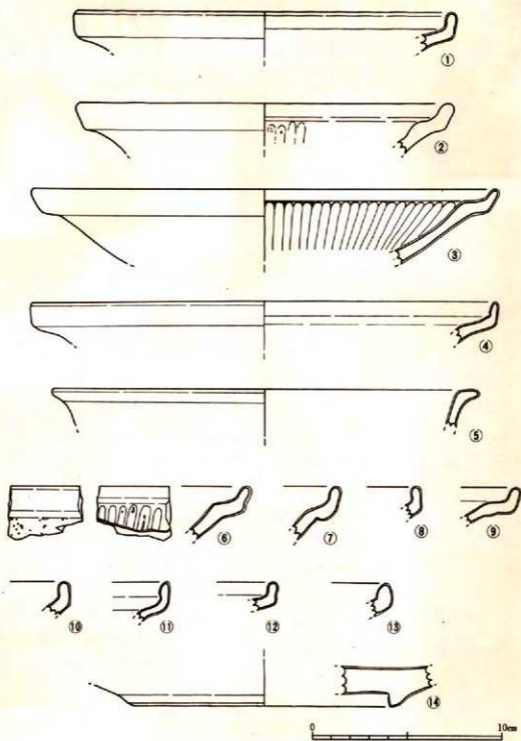
同図4は、口径12.7浬の碗で口唇部が円味をおび、口縁部が外傾する。胎土は灰色で、黒色の細粒を含む。釉色は暗褐色をなす。胎土等の特徴から、第10図12に類似する。古いタイプの青磁である。

第15図1～11は青磁底部で、1と9は盤とみられるものであるが他は碗とみられるものである。



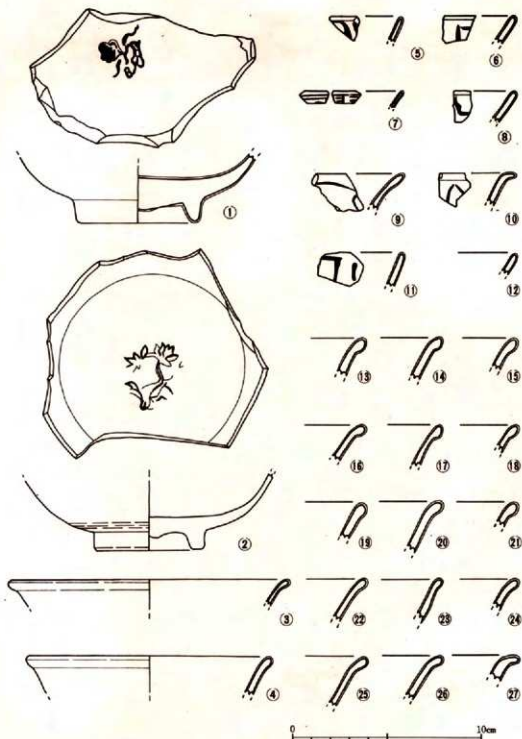
第12图 青磁实测图(1/2)

1·2 (L-91 II)、3 (V-101 III)



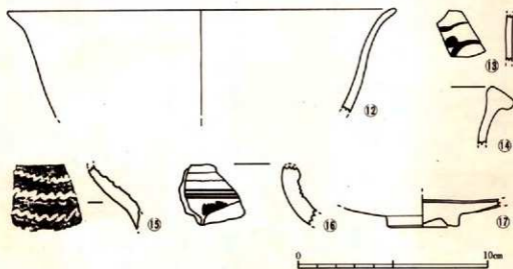
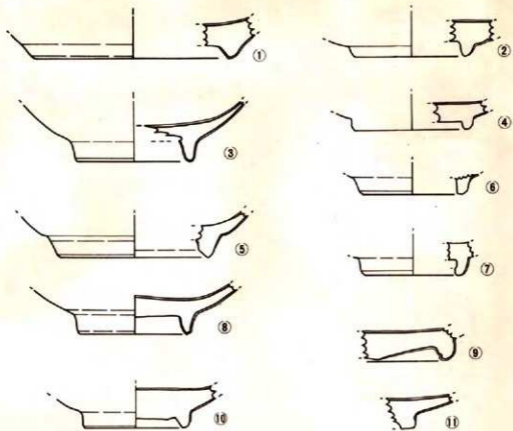
第13图 青磁·陶器实测图(1/2)

1~4·6·8~10·12·14(O-96Ⅲ)、5·13(P-100Ⅱ)、7(O-96Ⅱ)、11(V-101Ⅰ)



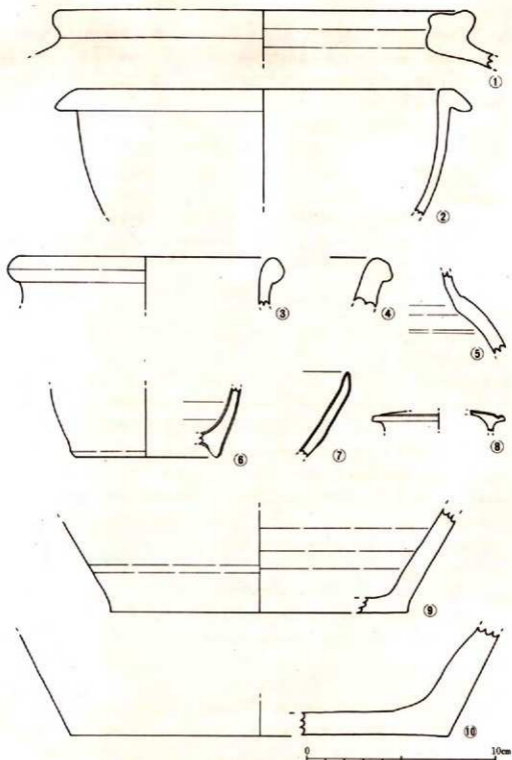
第14图 青磁实洲图 (1/2)

1 (L-91 I)、2·13~15 (D-112 II)、3·20·24 (L-93 II)、4·16·25 (O-96 III)、
 5·6·21 (V-101 I)、7·9 (O-96 I)、10 (L-93 I)、11·17·22 (V-101 II)
 18 (K-90 表探)、19·27 (K-91 II)、26 (V-101 III)、27 (K-91 II)



第15圖 青磁・白磁・須惠器・陶器・瓦器実測圖(1/2)

1・2・9・13・14・16(O-96Ⅲ)、3・8(表探)、4(L-93Ⅱ)、5(P-100Ⅲ)
6・10(V-101V)、7・11(O-96Ⅰ)、12・17(V-101Ⅲ)、15(P-100Ⅲ)



第16图 陶器·天目·白磁(1/2)

1·10(表採)、2(L-91Ⅱ)、3(O-96Ⅲ)、4(O-96Ⅰ)、5(D-112Ⅱ)、
6(L-93Ⅱ)、7(O-96Ⅴ)、8(P-100Ⅱ)、9(V-101Ⅲ)

白磁

白磁は青磁に比べるとときわめて、出土量が少ない。第10図2は、口縁部が尖り、直口するが、胴部から底部にかけて内湾する碗である。外面底部は露胎とみられる。胎土は白色、釉色は淡青色となり、全面に貫入がみられる。口径1.8匁。

同図3は、口縁部が尖り、直口する碗である。胎土は乳白色で、色は淡白色で貫入はみられない。光沢を有する良質の白磁である。口径1.7.4匁。

第15図1.2は、底部を欠く白磁碗、口唇部が舌状に尖り、口縁部が外反する。胎土は乳白色で白色釉がかけられた光沢を有する良質の白磁碗である。口径2.0.3匁、器厚4～5匁と薄手である。

同図1.7は、底径3.7匁の白磁碗である。胎土白色で底部をのぞく内外面に白色の釉がかけられ貫入がみられる。高台はへら削りで外側は垂直に、内側は内傾して削り出されている。外底部中央部を頂点として盛り上っている。

陶器

陶器は胴部片の出土は多いが、細片のため器形はわからない。底部と口縁部片でみると壺と壺である。

第13図5は口縁部が外側へ折れた壺屋産の新しい黒釉陶器である。

第16図1は、口径約2.2匁の黒釉陶器大壺である。外折れの口縁をなし、口唇部の内側は釉がはげている。胎土は暗灰色で胴部器厚9匁である。

同図2は、口径1.9.3匁の黒釉陶甕。口縁部が外側にまげられた外折状をなす。胎土は灰色で内外面に黒色釉がかけられている。胴部厚4匁と薄手である。

同図3は、口径1.3.5匁の黒釉壺。同5は褐釉陶器の小壺。同6は、底径7.5匁の小形の壺の底部とみられるもの、胎土は外面灰色で内面は赤褐色をなすもので、黒色の細粒が多く混入する。現存部はすべて露胎となっている。

同図9は、底径1.5.7匁の大壺とみられる。すべて露胎で胎土は、須恵色の灰色をなす。成形にはロクロが使用された痕跡はみられない。

同図8は、黒釉陶器小壺のフタである。外面は黒釉が施されているが内面は露胎である。直径7匁で厚さ2.5匁と薄手である。

天目

第16図7は天目茶碗で口縁部先端が舌状に尖り、直口するが胴部から下は折れて、内湾状をなす。内外面に厚い黒釉が施されている。

須恵器

第15図1.5は、口頸部に波状文を有する須恵器壺で内面にタタキ痕を有する。

瓦質

同図16は、頸部に三本の圈線とその下端に沈線文が施された。瓦質壺である。

小結

今回は、すべての出土品について充分検討する時間がなかったので、概略を記すことにする。今回資料を概観した段階で、気づいた点を箇条書にして、陶磁器についてのまとめをしたい。(1)第Ⅱ層以下出土の陶磁器は、14～15世紀のものが主体である。3片ほど13世紀までも逆のぼる可能性をもった青磁があるがその単独層が下層にあるのか次回以後に期待したい。また、(2)第Ⅳ層からは、土器とともに、須恵器が出土しているが中国陶磁は数点のみの出土である。この点は次回以後も確認したいことである。(3)今回の発掘では、青花磁が出土していないこともその特徴である。(4)今回の発掘をみるかぎり、第Ⅲ層と第Ⅴ層の時期差は区別がつけたい。このことも次回以後の課題である。(知念)

鉄釘

鉄釘は第17図1～10の10個が出土している

すべて角釘である。

第17図1は、長軸が5.2釐、幅5×4耗で長方形、頭は打ちつけによる折れ、長軸下方で曲っている。

同図2は頭を欠失する。幅は5×7耗で長軸中心部よりやや下方から折れ曲っている。

同図3は、長さ4.5釐、幅5×7耗と長方形で太く、頭は叩かれて、潰れている上に、長軸は中心部よりやや上部から直角に近い角度で折れ曲がり先端部も潰れている。

同図4は、長さ3.4釐、幅は4×4耗で正方形、頭は叩かれて、平たく潰れ、長軸の中心部より折れ曲っている。

同図5は、長さ4.3釐、幅4×5耗とやや長方形、上下端とも尖っており、長軸も曲っていない。

同図6は、頭部が欠失するもので、現存部でみると長さ3.7釐、幅5×4耗と長方形。

同図7は、下端部が欠失する。幅3×6耗で長方形。

同図8は、先端部が欠失する。幅6×5耗、長方形で太目、頭部は叩かれて折れ曲っている。

同図9は、長さ2.4釐、幅4×2.5耗、長方形で小形。頭部は叩きつけられ潰されている。

同10図は、上下端とも欠失する小形の釘で幅3×4耗である。

その他の鉄製品

第17図13は、用途不明の鉄板片である。図の上下は欠失するが、左右両側は原形をとどめている。幅3.8釐、厚さ2耗の薄い鉄片である。 (知念)

銭貨

第17図14は淳熙元宝、全体的に保存状態は良好で、銭文も明瞭である。厚内で、外輪の縁の巾も広く、方穿の郭もしっかりしている。背文に「十六」とあるので、南宋孝宗の淳熙16年(1189年)の鑄造となる。同種の銭貨は県内の遺跡からは未だ出土していないが、同名の一文銭は守礼門前横道から出土している。

同図15は半分が欠落しているが、宋元の文字が鮮明で、磨耗もなくしっかりしている。方穿の郭もよく残り、良質の銭貨である。背文に二の字がある。宋元の二字より、聖宋元宝、大宋元宝、皇宋元宝のいずれかであろうが、確定はできない。

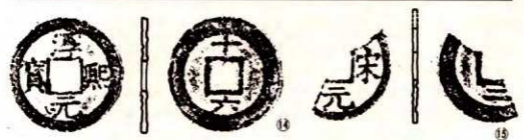
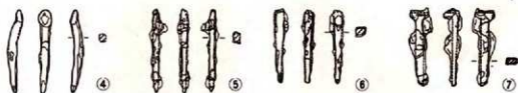
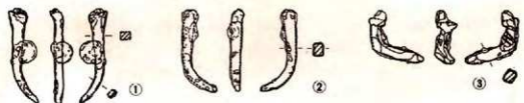
同図16は洪武通宝 銭面には硬質の器物で打ち叩いた打痕跡があり、面はくぼみ曲がって、銭貨は変形している。特に左斜上の部分がひどく、宝の文字の上部や方穿の郭の一部が破損している。背面も凹凸がひどく、不純物の付着や青錆がみられ不鮮明である。しかし、銭貨そのものは良質で、厚内である。

同図17は約3分の2が欠落し、宝の文字は判読できるが、下方の文字は僅かしか残っておらず判読が不可能、厚内で銭質は良好である。

同図18は磨耗がひどく、その原形の推定も困難である。無文で極めて薄く、形も普通の一文銭より小さい。孔も方形か円形か判断がつかない。黒色で火気を帯びた可能性がある。

番号	銭名	特徴	直径 (mm)	厚 (mm)	孔縦×横 (mm)	重量 (g)	出土地層
№14	淳熙元宝	完形品	28	1.7	7.5×7.6	6.88	D-112Ⅲ
№15	宋元	破損品	30	1.5		1.94	P-100Ⅳ
№16	洪武通宝	完形品	22.5	1.9	5.2×5.0	4.09	O-96Ⅱ
№17	宝	破損品		1.6		1.43	表 採
№18		破損品		1.3		1.21	V-101Ⅲ

第3表 銭貨出土一覧



第17图 铁钉·铁制品·钢制品(1/2)、钱货(1/1)

1~12·18(V-101Ⅲ)、13(O-96Ⅲ)、14(D-112Ⅲ)、15(P-100Ⅳ)、16(O-96Ⅱ)、17(表採)

その他の銅製品

第17図11は薄い銅板の破片。両面に金の鍍金の残部がある。コーナーに径約1mmの精巧な小孔が穿たれて、下部の両隅は逆方向に折れ曲っている。金具の一部であろうか。同図12も薄い銅板の破片。中央よりやや下方に径約1.5mmの小孔が穿たれている。(嵩元)

自然遺物

貝類

今回の調査した貝類は44種である(第4表)。

出土した貝類はⅢ・Ⅳ層が最も多く、各層中で板状に薄くブロック状に堆積している。貝種はマガキガイが最も多く、アラスシケマンガイ、ハマグリとつづく。

獣魚骨

獣魚骨の所見については、次回の報告にゆだねたい。(中村)

五. ま と め

北谷城の発掘調査は今回が初めてであり、保存状態とその範囲確認を目的としたものである。きわめて保存が良好と思われる二の郭を中心に、4mのグリットを10ヶ所もうけた小規模な調査であるが、一応の成果がえられた。

調査の結果、当初の予想よりも城の保存状態は良く、東西約160m、南北約50mの範囲に、3つに区分された石垣の郭を配するグスクであることが明らかになった。郭は地形にそって東西に連なる連郭式で、東が最も高く狭い一の郭、二・三の郭と順次西に低くなるとともに拡がりをもつ形態である。積石の手法は野面積みであり、厚い箇所幅約2m、高さは1.5mを越える所もある。積石の中や出土遺物には、建物に用いたとみられる面取りのサンゴ礫も散見されることから、郭内にかなり発達した構築物のあった可能性が強い。

城の西側に連なる丘陵部は未調査であるが、その地域もグスクの機能をもつ範囲と考えられることから、かなりおおがかりな規模であったことがうかがえる。

発掘調査をおこなった二の郭は全体的に南西方向へ緩やかに傾斜しており、旧島地の攪乱を受けたⅠ・Ⅱ層をのぞく下部のⅢ・Ⅳ・Ⅴ層はプライマリーな包含層で、安定した層序をなしていた。このことはグスクの機能を停止した後、耕作や近年の多少の攪乱を受けているものの、ほぼ原形を維持したものである。

出土遺物は青磁が最も多く、陶器、グスク土器とつづき、第Ⅲ層を主体とするが、第Ⅳ層を挟んで第Ⅴ層にも同様なことがみとめられる。しかし、くびれ平底

の底部をもつ、いわゆる後期砂丘系土器は第V層に多く出土する傾向があり、前述のグループとは時間的差異が認められる。

青磁は13世紀のものも数点あるが、14・15世紀のものが主体をなしており、本遺跡の盛行期はこの時期に位置づけることができる。16世紀ごろの遺物は皆無に等しいほど乏しく、また染付の出土もないことから、ある程度の時期を限定することができよう。

丘陵上からのくびれ平底土器の出土例は今回の収獲であった。これまで中部の具志川城・勝連城や南部の具志頭城などに報告例がある。これらの遺跡には立地に類似性がみられ、グスクの成立過程を考えるうえで数少ない貴重な資料であり、生活址の把握を含めて今後の調査の課題としたい。 (知念・中村)

註

1. 「おもろそうし」 仲原善忠・外間守善 角川書店 1973年
2. 「琉球祖先宝鑑」 慶留間知徳 琉球史料研究会 1962年
3. 「琉球国由来記」 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 名取書店 1940年
4. 「琉球列島の貝塚分布と圖年の概念補遺」 多和田真淳 沖縄文化財調査報告 1960年
5. 「具志川城」 沖縄百科事典 沖縄タイムス社 1983年
6. 「勝連城第一次発掘調査報告」 琉球文化財調査報告書 琉球政府文化財保護委員会
7. 「勝連城跡」 勝連町の文化財第6集 勝連町教育委員会 1984年
8. 「沖縄のグスク時代」 嵩元政秀 「沖縄の古代文化」 大林太郎・谷川健一・森浩一 小学館 1983年



上 北谷城遠景(西洋上より) 下 北谷城遠景(北東より)



上 北谷城遠景(南西より)

下 北谷城内樹林状況



上 積石残存状況(一の郭) 下 二の郭伐採前状況



上 二の群と採後の状況 下 グリット設定状況



上 K-90・91, L-91グリットの敷石遺構(西側より) 下 K-90・91, L-91グリットの敷石遺構(南側より)

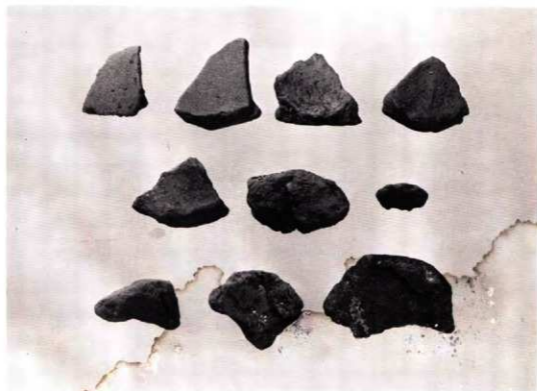


上 O-96グリット第Ⅲ層礫出土状況

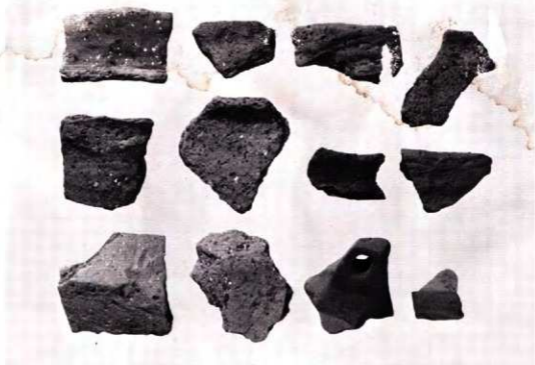
下 O-96グリット南壁面厚序と柱穴検出状況



上 V-101グリット西壁面層序状況 下 V-101グリット遺物出土状況

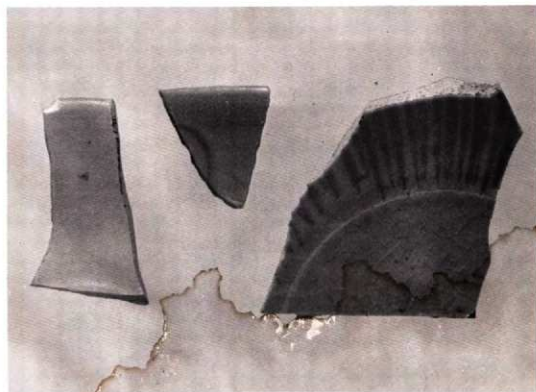
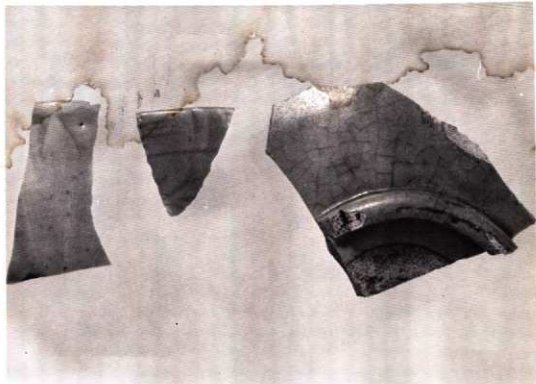


上 A類土器面 下 同内器面

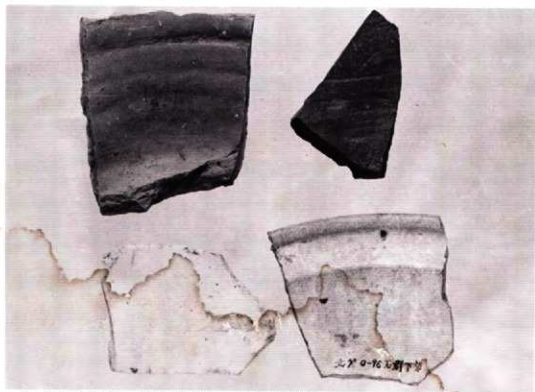
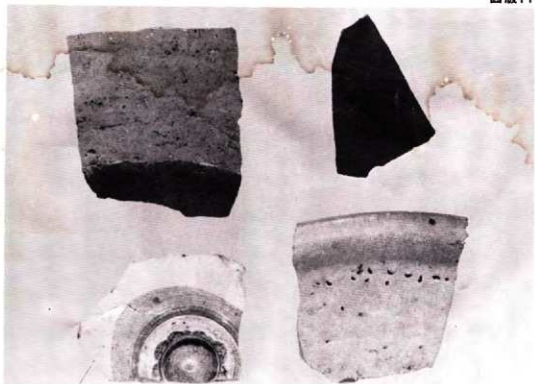


上 B·C類土器外器面

下 同内器面



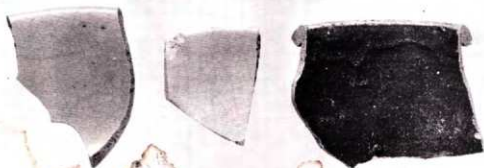
上 青磁外器面 下 同內器面



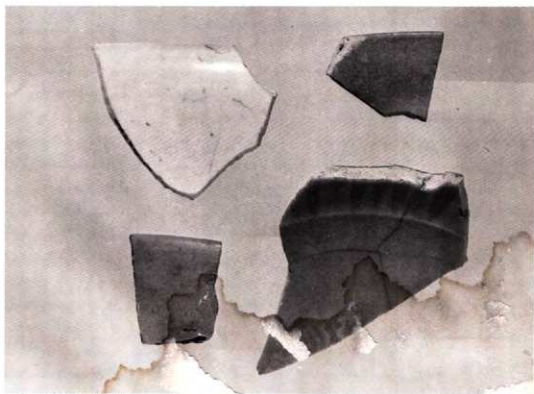
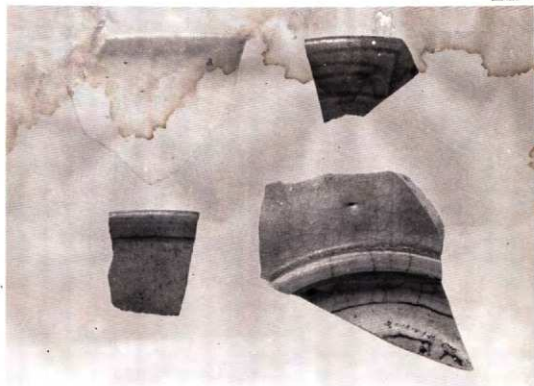
上 白磁·青磁·陶器·須惠器外器面 下 同内器面



上 青磁·陶器外器面 下 同内器面



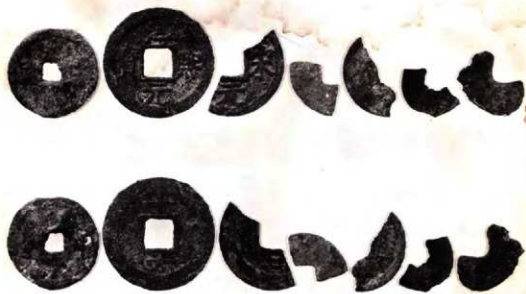
上 青磁・白磁・陶器外面 下 同内器面



上 白磁・青磁外器面 下



图版15 下 同内器产



上 銭貨表裏面 下 調査員スナップ

北谷町文化財調査報告書第1集

北 谷 城

—北谷城第1次調査—

発行 北谷町教育委員会
1984年(昭和59年)3月31日
北谷町字桑江592
電話(09893)6-3490
印刷 北谷印刷
北谷町字吉原790-1
電話(09893)6-1068
